

## 第6章

# 動きの中にあるワークショップを捉える視点

ここまで関与観察と vitality affect の感受に基づいてワークショップの体験を捉える視点を提起してきたが、ワークショップの体験過程の継時的な動態を、実感を伴った全体性をもった形としてどのように捉えて描写することができるのか、その理論的枠組みとその構造を考察する。

### 1. フィールドへの向き合い方

南 (2004) は、フィールドとは出会いにおいて「未分化な経験」として未だ「意味と秩序」があらさまではない現象領域であり、当初から要因に分解できる性質の物ではないとする (pp. 19-20)。それゆえに既成の見方や態度を保留して、現象そのものが示すところを忠実に捉えようとする姿勢が必要であるとする。客観的な観察という無関与的なかわりから見えるものではなく、「相手に人として向き合い、場に臨み、関与しながらの観察において手応えをもって現れてくる様相」(p. 20)こそがフィールドの出来事そのものである。

その現象が実際に生きられた体験としてどのようなものであるか、どのような「見え」、「感じ」をもった体験であるかという、体験の「質感」を明らかにしていく必要があるとする。そのためには予断を排してワークショップの接面を共に生きることが関与観察者にとっても必須かつ重要であり、そうした関与を通して、両義的で多面的な揺らぎのあるコミュニケーションの動態の中に接面のアクチュアリティを捉えていく必要がある。この点は鯨岡の

指摘と重なるものである。

そうした体験まるごとを「生活世界の記述的理解」として捉え直していく方法が、こうしたフィールドの事象や体験を捉える方法となる。それはつまり、ワークショップにおける主体間の多元的な主観性と間主観性が接面で交じり合う動態である接面のアクチュアリティを、「まるごと」、「ありのまま」に記述的に捉えて理解していく視点と方法でフィールドに向き合っていくことである。

## 2. トランザクショナルなワークショップの体験過程

では、ワークショップの間主観的な体験と実感の動態とは具体的にどのように想像することが可能であろうか。南（2006）は「私（自己）」の情動は「他者（環境）」の情動や行動をある方向や仕方にアフォードするのだとし、こうしたアフォードダンスは「自己—環境系のなかでトランザクショナルに産出される」（p. 30）という。そして相互に情動や行為を表出し合い、アフォードし合うことは、相互作用的（interactional）というよりは相互浸透的（transactional）<sup>1)</sup>であり、予測できる相互のやりとり（相互作用）の先に予測できるようなものではないという。

もちろん場（環境）を相互作用的に見ることは可能であるが、スターンが考えるように場の相互交流を相互作用的なコミュニケーションと見るか、対人コミュニケーションと見るかによって、場の事象の感受のされ方や生きられ方、生成される意味は変わってくる。南が自己と環境の関係を相互浸透的と見るように、刻一刻と立ち現れてくるワークショップの出来事は、予測（意図や方向性）に回収して理解してしまえるものではない。観察者自身もワークショップへの関与と観察のプロセスを通して、共に接面を生きる中で感受認識が変化し、事象の感じられ方や見え方が変化していくという、自身の変容体験を生きることになると予想される。予測を絶えず解き放つことで見えてくる「あるがまま」、「まるごと」とは、個々の行為の相互連関の積み上げ（interaction：相互作用）としてのみ理解しうるものではなく、相互に浸透し合いながら変容していくトランザクション（transaction：相互浸透）の動態

として捉える必要がある。

### 3. 二者関係での理性的・感性的コミュニケーションと接面の構造

ワークショップの体験過程の接面の動態を二者間のコミュニケーションにおける理性的コミュニケーションと感性的コミュニケーションに分けてみると、図6-1のような構造として理解できる。

まず上部の理性的コミュニケーションにおいて概念や意味が交わされ合い、ワークショップにおいて明示的な目的（絵を描く、映像を作る等）に向かって営まれる目的合理的な相互作用が取り交わされる。互いが持つ意図と目的的な意識によって絶えず自他は分離しており、いかに自分の意図を相手に伝え、理解させたり、相手の意図を理解するかが相互に目指される。その点では相互交流についてスターンが述べたように、相互行為的に捉えることができる理性的コミュニケーションは意図や目的に沿って「他者の信念や行動システムを変えようと、情報を交換したり伝達すること」(Stern, 1989, p. 173)を志向し、他者を操作しようとする意識的で目的的な行為的側面を持つ。ここに着目してワークショップを観察すれば、知らず知らずのうちに他者操作性を志向した目的に動機づけられた事象の理解と分析を行なうことに繋がっていく。

一方で下部にある感性的コミュニケーションでは、情動やその vitality affect が交わされ、共に感じている間主観的な体験の実感としての接面（図中「接面」の円形部）を形づくる。その実感は力動感の継時的な持続によって、ある「感じ」というまとまりをもった動的な形「＝活性化輪郭 activation contour」となる。この形と感情のまとまりとは「Affective な全体性」(椎塚, 2013)と考えることができる。

理性的コミュニケーションを中心とした相互作用と、感性的コミュニケーションに媒介された接面の動的生成（動態）として感受認識される、ワークショップの間主観的な実感に根ざして、体験の固有性と文脈性を含めた意味的まとまりを持つエピソード記述として統合的に把握し・表現し、省察を加えていくことで、実感と繋がった体験理解を生み出すことが可能になる。